

---

「新約のきよめ」

第14章 ベウラの地

## ベウラ

「めとられた」という意味。(イザヤ62:4では「夫のある国」)

バーアル(「めとる」あるいは「…の主となる」という意味)の動詞から出ている。  
夫を自分の主として使えるというような意味が含まれている。

神は、ご自身の礼拝される地、すなわち神が所有し、支配し、  
さらに産物を与える地に対して密接な関係を持つことを、  
このような名称をあたえることによって示しているのであろう。

未来におけるイスラエルの地の回復された状況を表す名称として、  
詩的な意味で用いられていると言える。

## ベウラの地

私たちが招かれている高く晴朗な相続地、約束の地。

地上において、経験できる。

物質的にはわれわれはまだ肉体にあるが、霊においてはすでに天にある。  
と言える状態。

パウロが「天の所」(新改訳2017では「天上」と言っているもの。

これは地上の経験であり、卓越した高いクリスチャン経験。  
この世の生涯にあって、文字どおり目に見えない世界に生きることができる。

罪と悲しみの暗いこの世に生きながら、より高い、より甘美な、より純潔な世界を  
持っている。天上の空気の中に生きることができる。  
クリスチャンは死ななければ天国を知り得ないのではない。

## ベウラの地のある場所

それは場所というよりは、霊的空気、状態のこと。

私たちがキリストのおられる所にいることが確かであるときに与えられる。

私たちがキリストのうちに宿る度合い、キリストとの交わりに生きる度合いに応じて天の栄光の手付金と初穂を持つ。

ユダヤ人にとってのカナンがそのひな型。

ある人はカナンは天の完全な安息をあらわすと言うが、それは一時的な安息であり、さらに高い安息があることがヘブル人への手紙を見るとわかる。

ヨシュアが与えた物質的な安息にまさる霊的な真の安息。

それは主イエスが私たちの心を全く領有し、主が私たちのうちに、私たちが主のうちにあるようになるときにだけ、達することができる。

そのすばらしさは、それまで経験したどんな恵みもかすんで見えるほどの輝き。

## それは私たちの近くにある

それは遠くにある「黄金郷」ではない。  
死の河の境界にあって、地上生活の終わりを迎えるまで到達できない  
ところでもない。

それは私たちの近くにある。

イスラエルの人たちが一か月もかからず入れるはずのカナンに入るのに  
40年もかかったのは、不信仰のため。

信仰によって、私たちは今日ベウラの地に入ることができる。

ヘブルの「安息に入るよう力を尽くして努め…」の「努め」は、長くつらい骨折りを  
あらわす語ではない。もともと「ただちに」「急いで」という意味。